

海景観賞の型とその変容状況に関する研究 江戸期と明治期を通じて

寶泉 立夫¹・横内 憲久²・岡田 智秀³

¹学生会員 日本大学大学院理工学研究科不動産科学専攻（〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台1-8-14, E-mail:mr4008@i.arch.cst.nihon-u.ac.jp）

²正会員 工博 日本大学理工学部海洋建築工学科（〒274-8501 千葉県船橋市習志野台7-24-1, E-mail:yokouchi@ocean.cst.nihon-u.ac.jp）

³正会員 工博 日本大学理工学部海洋建築工学科（〒274-8501 千葉県船橋市習志野台7-24-1, E-mail:t-okada@ocean.cst.nihon-u.ac.jp）

ウォーターフロント開発の魅力である海の景観（海景）は、海景とそれを眺める人との間に建築物が介在することでさまざま創出される。そうした観点のもと、先行研究において、「人」「建築物」「海景」の3要素の関係からなる「海景観賞の型」を抽出したが、江戸期と明治期において同一の「海景観賞の型」が得られたにもかかわらず、それらの視点場には変化がみられた。そこで本研究では、江戸期と明治期における「海景観賞の型」の空間構成および視覚構造に着目し、両時期の各型の観賞形態について比較分析を行うことで、江戸期から明治期における「海景観賞の型」の変容状況を明らかにした。

キーワード: 景観, 空間整備・設計, 名所案内記, 視覚構造

1. 研究の背景および目的

わが国の海辺では古くから、白砂青松に代表されるような海浜を構成する自然物の取り合わせはもちろん、海辺と建築物という自然と人工物との調和もまた愛でられてきた。それは、図-1に示すように、建築物が海辺に介在することで、良好な海景を享受できる視点場を形成したり(図-1①)、海の景観(以下「海景」)の一構成要素として海景の魅力を引き立たせる(図-1②)など、海辺の景観的魅力を高めるためであろう。このように海景を観賞する際に建築物が果たせる役割に着目し、「人」と「建築物」と「海景」の3要素の関係から創出される、海景の観賞形態を導くことが本研究のねらいである。

こうした観点から岡田らの研究¹⁾では、「江戸名所図会」²⁾を分析資料として、「人」「建築物」「海景」の3要素の関係から創出される「海景観賞の型」を6つ抽出し、それらの型を成り立たせる要件を、人が空間を認知する際の指標といえる視覚構造(視距離・視野角等)より解明した(表-1)。また、筆者らの研究³⁾では「明治東京名所図会」⁴⁾を分析資料として、明治期の「海景観賞の型」を抽出した結果、江戸期と明治期の「海景観賞の型」は同一の6型であるものの、それらの視点場は時代によって変化がみられることを明らかにした(表-2)。これは、「海景観賞の型」は両時期で共通しながらも、その観賞方法(観賞形態)に変容が生じていることが要因と推察される。

そこで本研究では、江戸期と明治期における「海景観賞の型」の空間構成および視覚構造に着目し、両時期の各型の観賞形態について比較分析を行うことで、江戸期から明治期における「海景観賞の型」の変容状況を明らかにすることを目的とする。

2. 先行研究における分析方法と成果

江戸期と明治期の「海景観賞の型」の抽出は、共通の方法で行っている。その具体として江戸期の「海景観賞の型」の抽出方法を以下に示す。

① 絵図の選定

江戸期の「海景観賞の型」を抽出するにあたっては、長年に渡り多くの人々に評価を受け続けてきた資料を用いることが肝要であると考え、江戸期から現在までに長き

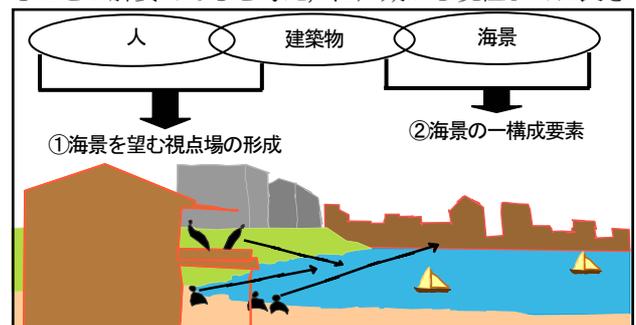


図-1 建築物の景観的役割

表-1 江戸期の「海景観賞の型」の成立要件

型名	江戸期の「海景観賞の型」の成立要件
(1) 同時型	視対象となる陸上と海上に創出したにぎわいは「一般俯瞰域」に含まれ、その視対象までの視距離は「親密距離」にあることで、海・陸という異なる空間が同時一体的に眺められる。
(2) 開放型	建築物が柱と屋根で構成されることで、ヒューマンスケールの屋内からダイナミックな海のパノラマ景が享受できる。また、海景への俯角が 8° 以下となり、「一般俯瞰域」に海景が含まれない場合は、視線を海へ導くような添景物(自然物)が視点場近傍にあることで海景が眺めやすくなる。
(3) 引き締め型	海景においてスリットまたはアイストップを形成する建築物は、視点場から「建築として印象に残る 110m」以内にある。ただし、スリットを形成する建築物が、特定の視点場から「静視野」に含まれない場合は、沖合に離島や船舶等によるアイストップの存在によって引き締め効果が得られる。
(4) 水面一体型	水面近くの建築物内の視点場から、「波が視認できる 50m」以内にある海景を眺めることで、水面との一体感が愛でられる。また、視点場が水面に近くの外側である場合でも、「適度な建物囲繞感」が創出されることで水面との一体感が得られる。
(5) 活動誘発型	屋内の視点場から 3~2m に海岸線付近での人の活動が眺められるため、屋内から屋外へ活動が誘発され、双方の視点場間においては、視覚的に適度な距離が保たれる。
(6) 視線誘導型	海景が「一般俯瞰域」に含まれない場合でも、視野に入りやすい緩勾配の坂や、視点場が適度な囲繞感を得られるような建築物の配置や高さであることで視線が海へ導かれる。

表-2 江戸期と明治期の「海景観賞の型」の概要

型名	「海景観賞の型」の概要	
	江戸期(江戸名所図会)	明治期(明治東京名所図会)
(1) 同時型	陸・海上それぞれのにぎわいを、建築物内の高い視点場から同時に一望できることで、陸と海という異なる空間のにぎわいが同時一体的に楽しめる。	陸・海上それぞれのにぎわいを、建築物内の低い視点場から同時に一体的に楽しめる。
(2) 開放型	高台に立地する建築物が大きな開口部をもち、視野を開放的にすることで、眼前の自然景観や広大な海が一体となって一望できる。	海岸線より後退して立地する建築物内(旅館)の高い位置を視点場とし、海側を全面開口とすることで、開放感を得ながら遠方の海景を眺めている。
(3) 引き締め型	海道を視点場として、海岸線沿いに連立する建築物の間隙(スリット)により引き締められた海景が、シークエンスとして眺められる。 出島上の建築物がアイストップとなることにより、広大かつ茫洋として視線が定まりにくい海景が引き締められて享受できる。	視線が汀線に誘導され、その先に建築物が立地することで、建築物がアイストップとなり、「海景」を引き締めている。 建築物が海岸線沿いに林立することで囲繞水域が形成され、人は対岸の建築群と囲繞水域のにぎわいを享受している。
(4) 水面一体型	雁木や連立する建築物の縁縁効果によって際立った水面の表情が楽しめる。 接岸した建築物内の低い視点場(座敷)から水面の表情を見て一体感が楽しめる。	海岸線沿いに立地する建築物の床面によって地表面が不可視となり、柱と梁に縁取られた海景を眺めることで、水面との一体感を享受している。
(5) 活動誘発型	海岸線沿いに立地する建築物が、屋内外の行き来を容易にする形態をとることで、潮の干満で変化する海景が多様な視点場で楽しめる。	
(6) 視線誘導型	高台の視点場と視対象(海)の大きな高低差や海方向に下る坂道の沿道両側に立地する建築物により、内陸のまちなかから遠方に広がる海へと視線が誘導される。	

に渡り愛でられてきた「江戸名所図会」を分析資料とした。そして、分析資料より「人」「建築物」「海景」の3要素が同時に描かれた絵図を抽出し、さらに、絵図の題名(主題)や各名所(事例)の解説文に着目して、3要素の関連性が特定できた絵図(事例)のみを選定した。その結果、「江戸名所図会」に掲載された全絵図(649事例)のうち、3要素の関わりが密接な対象絵図は21事例となり、この中から1枚の絵図であっても複数の視点場・建築物・海景が特定できる場合もあったため、合計31景となった。

②選定絵図から型を得る方法

分析資料より抽出された絵図21事例(31景)から「海景観賞の型」の抽出を行うのだが、絵図の中で特定された「人」「建築物」「海景」の3要素は、それぞれの位置関係によって、海景の眺め方(観賞方法)や海景の見え方が異なってくると考えられる。そこで、分析対象絵図31景について、「人」「建築物」「海景」の3要素それぞれの位置を図-2に示す各軸上(X, Y, Z軸)に布置し、3要素の交点である空間座標の集合具合と「人」「建築物」「海景」の状況を照らし合わせて類型化を行った。

型を得るために用いた図-2は、原点を海岸線として、X軸は人の位置(視点場)、Y軸は建築物の立地場所、Z軸は海景の位置(当該絵図の主題や解説文で描写された視対象などがある場)を表している。よって、いずれの軸も原点から離れるほど海岸線から遠ざかること(「人」

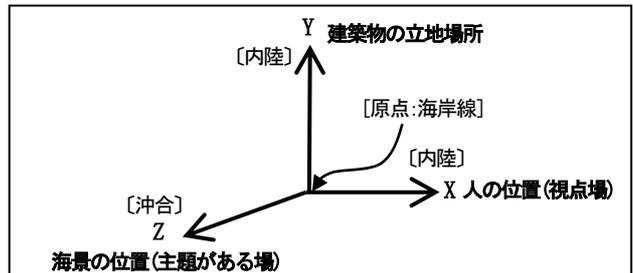


図-2 「人と建築物と海景」の関係を表すための3軸「建築物」は内陸方向、「海景」は沖合方向を意味する。なお、海岸線を原点としたのは、31景の全分析対象絵図における3要素共通の位置が海岸線となったことから、それを基準として3要素の位置関係を捉えたかったためである。この解析手順を踏むことで、各絵図の構図について解析するのではなく、それらの絵図が有する当時の空間構成を抽出・分析することができる考えた。

分析対象とする31景のX, Y, Zの座標を求めるにあたっては、人の位置(視点場)、建築物の立地場所、海景の位置それぞれにおいて、分析対象となる全絵図を海岸線に最も近い絵図から最も遠い絵図まで相対的に序列をつけ、その序列を、各軸に示された海岸線からの距離の序列を意味する目盛上に布置した。このように、3要素の位置を絵図から特定する具体的な方法については、建築物の立地場所であるY軸を例として、その位置に対応する事例とともに図-3に示す。

以上の方法によって、全分析対象絵図 21 事例(31 景)の空間座標を捉え、その結果を示したものが表-3 である。この表-3 に示す空間座標の集合具合と各絵図の特徴をあわせて分析した結果、「水面一体型」「引き締め型」「活動誘発型」「同時型」「開放型」「視線誘導型」という6つの「海景観賞の型」が得られた。

また、明治期についても同様の方法より「明治東京名所図会」を対象に、江戸期と同じ上記6つの型が捉えられている。そこで次章では、これらの研究成果を用い、本研究の目的である江戸期と明治期の「海景観賞の型」の変容状況を把握するための研究方法を示す。

3. 研究方法

江戸期から明治期における「海景観賞の型」の変容状況を捉えるため、両時期の各型の空間構成および視覚構造からそれぞれの型の観賞形態を比較考察する。このため、分析対象は先行研究¹⁾³⁾で導いた江戸期・明治期の事例と空間構成・視覚構造とするが、明治期の研究成果はこれまでのところ「海景観賞の型」の抽出のみにとどまっている。そのため、本研究ではまず明治期の「海景観賞の型」の空間構成と視覚構造を明らかにし、その結果と江戸期の研究成果を比較考察する。

なお、「明治東京名所図会」の分析を通じて捉えられた「海景観賞の型」の空間構成を視覚構造から求めるにあた

っては、それらを成り立たせている絵図の空間構成を定量的に捉える必要がある。そこで、各絵図の「平面」「断面」を構成する要素の実寸を求める。

各絵図の「平面」を構成する要素(街道の幅、視点場・建築物の海岸線からの距離等)の実寸については、当該要素が当時存在した位置を、「明治前期手書彩色関東実測図」⁵⁾など当時の実測図⁶⁾から把握する。

また、「断面」を構成する要素を捉えるにあたり、視点場の地形的高さは地形図⁷⁾⁸⁾を用いて求める。そして、建築物は絵図中に描写された建築物自体の諸元を記した資料が見当たらなかったため、当時の建築物に関して一般的な諸元が記された資料^{9)~13)}に基づいて算出した。また、上記の方法で得られなかった建築物の諸元については、江戸期のもの¹⁴⁾¹⁵⁾を援用した。なお、「活動誘発型」と「視線誘導型」は、型を構成する絵図が江戸期と明治期で同一であった*ために考察の対象外とした。

以上の方法から空間構成が捉えられた絵図は、「明治東京名所図会」より明治期の「海景観賞の型」を抽出するのに用いた絵図22事例(30景)のうち、江戸期と共通する「活動誘発型」「視線誘導型」の絵図2事例(5景)を除く20事例(25景)中、18事例(20景)であった。それらの絵図の空間構成の分析結果を示したものが表-4である。

以降では表-3 に示す各絵図(型)の空間座標の分布状況と表-4 に基づき、江戸期から明治期における「海景観賞の型」の変容状況を、各型の空間構成および視覚構造から比較考察していく。

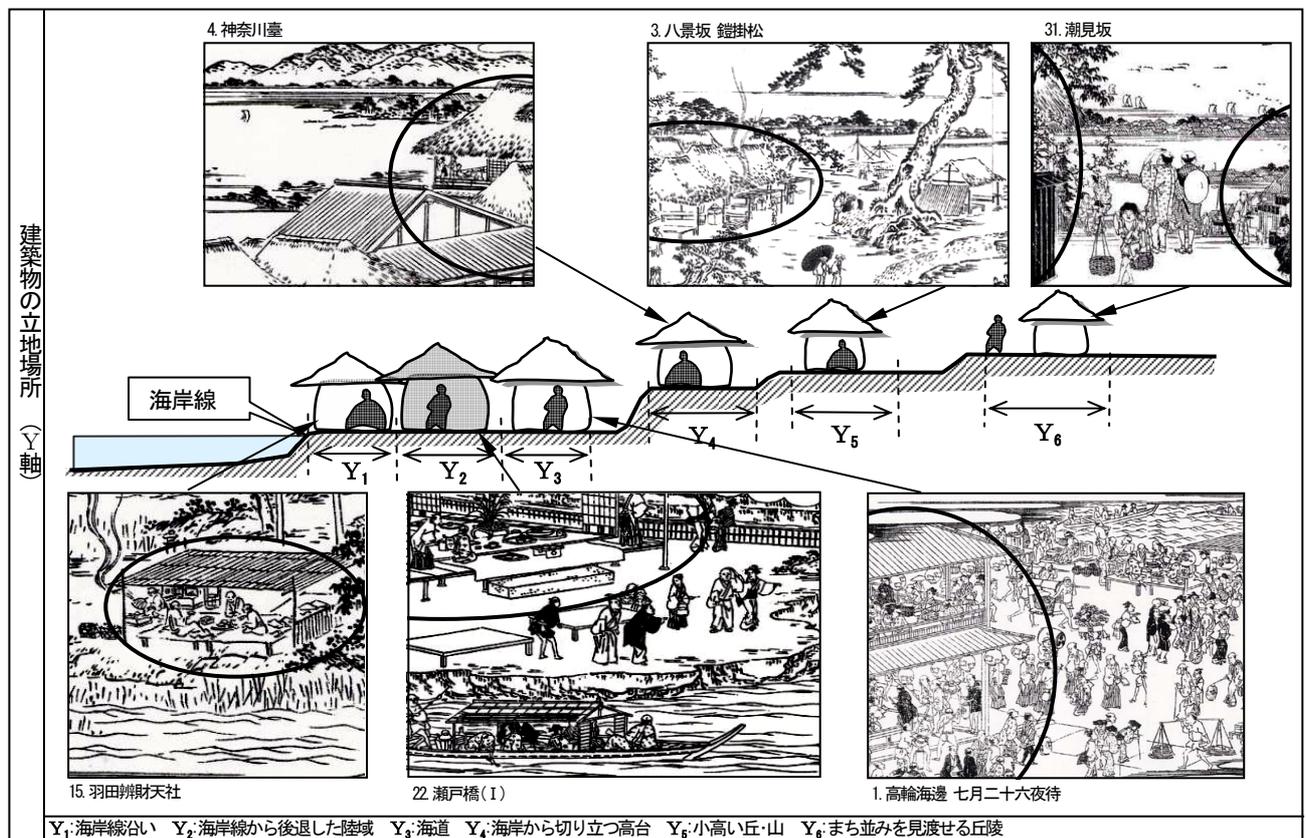


図-3 建築物の立地場所の求め方(Y軸)

表-3 「人と建築物と海景」の関係からみた海景観賞の型

	江戸期(江戸名所図会)	明治期(明治東京名所図会)	
「海景観賞の型を構成する事例の空間座標			
型を構成する図	<p>(1) 1. 高輪毎邊七月二十六夜待</p> <p>(2) 2. 御殿山 看花 3. 八景坂 鐵掛松 4. 神奈川臺 5. 金龍院 飛石 6. 清澄寺</p> <p>(3) 7. 寒橋 8. 佃島住吉明神社 9. 町屋村龍華寺 10. 寄木明神社 11. 洲崎弁天 12. 瀬戸辨財天</p> <p>(4) 13. 高輪大木戸 14. 品川驛 15. 羽田辨財天社 16. 瀬戸明神社(V) 17. 洲崎明神</p> <p>(5) 18. 洲崎辨財天社(I) 19. 洲崎辨財天社(II) 20. 洲崎辨財天社(III) 21. 洲崎辨財天社(IV) 22. 瀬戸橋(I) 23. 瀬戸橋(II) 24. 瀬戸橋(III) 25. 瀬戸橋(IV) 26. 瀬戸明神社(I) 27. 瀬戸明神社(II) 28. 瀬戸明神社(III) 29. 瀬戸明神社(IV) 30. 行徳衛</p> <p>(6) 31. 潮見坂</p>	<p>1. 逗子日陰の茶屋の圖 2. 品川驛が神社と天祖神社 3. 高輪毎邊七月二十六夜待</p> <p>4. 岩人樓ヶ上より富嶽を望む圖(I) 5. 鶴沼の圖(I) 6. 逗子長者園之長者ヶ崎崎崎の圖 7. 金澤千代本の圖(II) 8. 恵比寿樓全景並に同樓旭の圖 9. 金亀樓</p> <p>10. 岩人樓ヶ上より富嶽を望む圖(II) 11. 明治村明治館の圖 12. 鷗沼の圖(II) 13. 芝公園丸山の圖(I) 14. 海晏寺の秋色 15. 芝公園丸山の圖(II) 16. 八景坂鐵掛松</p> <p>17. 築地海岸渡船場より佃島を望むの圖 18. 海岸通り 19. 寄木明神社</p> <p>20. 金澤千代本の圖(I) 21. 羽田辨財天社 22. 品川驛 23. 本牧神社 24. 芝浦景(I) 25. 芝浦景(II)</p> <p>26. 洲崎辨財天社(I) 27. 洲崎辨財天社(II) 28. 洲崎辨財天社(III) 29. 洲崎辨財天社(IV)</p> <p>30. 潮見坂</p>	
6つの「海景観賞の型」の典型例	<p>捉えられた時代:江戸・明治期</p>	<p>捉えられた時代:江戸期</p>	<p>捉えられた時代:江戸期</p>
	<p>捉えられた時代:明治期</p>	<p>捉えられた時代:江戸・明治期</p>	<p>捉えられた時代:江戸・明治期</p>
各型の空間座標の分布状況	<p>(1) 「人」(X₀)「建築物」(Y₀)は「引き締め型」や「水面一体型」より海岸線から内陸に位置し、「海景」(Z₀)は6型の中で最も沖合いに存在する。</p> <p>(2) 「海景」(Z₅・Z₆)が他の類型より最も海岸線から離れた位置にあり、「人」(X₁・X₂)と「建築物」(Y₁・Y₂)は6型の中で最も内陸にある「視線誘導型」に次いで海岸線から離れて位置する。</p> <p>(3) 「人」(X₁・X₂)「建築物」(Y₁)が他の類型と比べて海岸線に最も近く、「海景」(Z₀)は6つの類型の中でも比較的沖寄りに位置する。これは、「人」(X₁・X₂)「建築物」(Y₁)「海景」(Z₀・Z₁)が6型の中で最も海岸線近くに寄り集まるものである。</p> <p>(4) 「人」(X₁・X₂)は6型の中で最も海岸線寄りであり、「建築物」(Y₁)は「引き締め型」や「水面一体型」に次いで海岸線に近く、「海景」(Z₁~Z₅)となりZ軸上に幅広く分布している。</p> <p>(5) 「人」(X₀)と「建築物」(Y₀)は、6つの類型の中で海岸線から最も離れた位置にあり、「海景」(Z₀)は6型の中で最も沖合いにある「同時型」に次いで海岸線から離れた位置に存在する。</p>	<p>(1) 「人」(X₀)「建築物」(Y₀)は「引き締め型」や「水面一体型」、「活動誘発型」より海岸線から内陸に位置し「海景」(Z₀)は6つの類型の中で最も沖合や、水面一体型に次いで海岸線寄りに位置している。</p> <p>(2) 「人」(X₁・X₂)「海景」(Z₁・Z₂)が「視線誘導型」に次いで海岸線から離れた位置にあり、「建築物」(Y₁・Y₂)は「海景」と同様に、「視線誘導型」に次いで海岸線から離れたところに位置するものである。</p> <p>(3) 「人」(X₁・X₂)「建築物」(Y₁)が他の類型と比べて海岸線に近く、「海景」(Z₀・Z₁)は6つの類型の中でも比較的沖寄りに位置する。</p> <p>(4) 「人」(X₁)「建築物」(Y₁)が6つの類型の中で最も海岸線の近くに寄り集まり、「海景」(Z₀~Z₅)と、原点に近い海岸線寄りや海岸線から離れた沖が海景の主題となっている。</p> <p>(5) 「人」(X₁・X₂)は6つの類型の中で最も海岸線寄りであり、「建築物」(Y₁)は「引き締め型」や「水面一体型」の次に海岸線沿いに近い位置となる。また「海景」(Z₁~Z₅)に分布している。</p> <p>(6) 「人」(X₀)と「建築物」(Y₀)は、6つの類型の中で海岸線から最も離れた位置にあり、「海景」(Z₀)は6型の中で最も沖合いにある「同時型」に次いで海岸線から離れた位置に存在する。</p>	

4. 結果および考察

(1) 同時型

同時型の空間座標の分布状況(表-3)をみると、江戸期には海景が6つの型の中で最も沖合いであるZ₆に位置していたのに対し、明治期になると江戸期と同様にZ₆に位置している事例に加え、最も海岸線近くであるZ₁に位置している事例がみられる。

このような空間座標の変化状況が読み取れた同時型は、江戸期には、陸・海それぞれのにぎわいを建築物内の低い視点場から同時に一望できることで、陸と海という異なる空間のにぎわいが同時一体的に楽しめるという特徴を有している(表-2)。この型の該当事例である「高輪海邊七月二十六夜待(図-4)」(所在地:港区高輪2丁目)では、「断面図」より、建築物は海岸線から約20m内陸に立地し、視点はその建築物の2階床の高さ3.5mに、一般的な視点の高さ1.5m(着座時70cm)¹⁶⁾を加えた4.2~5mの高さにあることがわかる。これより、陸・海のにぎわいは4.2~5.0mの高い視点場から、「一般に俯瞰しやすいとされる俯角8~30°の領域(以下「一般俯瞰域」)¹⁷⁾で眺められていた。また、海景までの視距離は約20mであり、「親しげな距離とされる12m~24mの領域(以下「親密距離」)¹⁸⁾を満たすことで、そのにぎわいが手にとるように伝わってくる状況であった。このように、江戸期の同時型では、海・陸が同時に眺められる視点の高さが確保され、それらを「一般俯瞰域」と「親密距離」で眺められるという空間構成により、陸域の景観と海景との同時一体

性が得られていたといえる(表-1)。

一方で、明治期になると、建築物内の低い視点場から陸域の景観と海景を一望するという事例がみられた(表-2)。この型の該当事例である「逗子日陰の茶屋の圖(図-5)」(所在地:三浦郡葉山町堀内15)について「平・断面図」より平面・断面構成を分析したところ、建築物は海岸線から約10m内陸に立地し、視点はその建築物1階の床高約90cmに、一般的な視点の高さを加えた1.6~2.4mの高さにあることが分かった。これより、表-4の【視対象の視認状況①】に示すように、「一般俯瞰域」である4.2~17.1mの範囲に、視対象(海道を行き交う人々と海水浴)が同時に眺められることが捉えられた。また、視点場前面に道幅約10mの海道を介するため、【海景までの視距離①】は約10mと「親密距離」は満たさないものの、人々の表情が「耐えられない距離3mを超えた快適と感じられる領域」¹⁹⁾を満たすため、海水浴をしている人々の表情が適度に視認できていたと考えられる。

以上のように、明治期の同時型は、視点場が高さ1.6~2.4mと江戸期にみられた視点の高さ4.2~5mと異なり低視点場であったが、陸・海の景観が「一般俯瞰域」に含まれ、それらが適度な距離で眺められることで、陸域の景観と海景のにぎわいが同時視体験できていた。つまり、この同時型は江戸期と明治期に空間構成の変容がみられたが、視対象となる陸・海のにぎわいが「一般俯瞰域」で眺められる高さに視点場を確保し、さらに海景が適度ににぎわいを享受できる視距離(3~135m)¹⁹⁾にあることで、同時一体的に享受できるものといえる。

表-4 「海景観賞の型」の空間構成

型名	総図名(所在地)	型の空間構成				
同時型	高輪海邊二十六夜待 (港区高輪2丁目)	【海景】にぎわい景が視点場から約20m	【建築物】内陸20m 【視点場】高さ4.2~5m(建築物内)、標高0m [俯角]14°	【視対象の視認状況①】 陸と海がともに①に入る。	【視対象となる海景は(A-B-C)にある。	
	逗子日陰の茶屋の圖 (三浦郡葉山町堀内15)	【海景】にぎわい景が視点場から約10m	【建築物】内陸10m 【視点場】高さ1.61~2.41m(建築物内)、標高0m [俯角]14°			
	品川諏訪神社と天祖神社 (品川区南大井1-4-1)	【海景】にぎわい景が視点場から約60m	【建築物】内陸60m 【視点場】高さ1.61~2.41m(建築物内)、標高5.68m [俯角]8°			
開放型	八景坂御掛松 (大田区大森北1丁目)	【建築物】高さ2mの設置張り	【建築物】内陸約60m 【視点場】高さ1.5m(建築物内)、標高約15m [俯角]1°	【視対象の視認状況②】 海景が①に含まれない。	【視対象となる海景は(D)にある。	
	芝公園内山の圖 (東京都港区芝公園)	開口部高さ不明	【建築物】内陸約30m 【視点場】高さ1.5m 標高22m [俯角]4°			
	海晏寺の秋色 (品川区南品川2-8-2)	開口部高さ不明	【建築物】内陸約17m 【視点場】高さ1.5m 標高14m [俯角]5°			
	鷗子の圖 (港区海岸2丁目)	開口部高さ2.5m	【建築物】内陸約60m 【視点場】高さ5.7~6.5m(建築物内)、標高7.5m以下 [俯角]1°			
	金澤千代本の圖(Ⅰ) (横浜市金沢区瀬戸2-13)	開口部高さ2.5m	【建築物】内陸約20m 【視点場】高さ5.7~6.5m(建築物内)、標高5m以下 [俯角]14°			
	同上金津樓の圖 (横浜市江の島1-9)	開口部高さ2.5m	【建築物】内陸90m 【視点場】高さ5.7~6.5m(建築物内)、標高59.95m [俯角]30~40°			
	岩人樓ヶ上より富嶽を望む圖 (横浜市江の島2-2-7)	開口部高さ2.5m	【建築物】内陸約60m 【視点場】高さ5.7~6.5m(建築物内)、標高約50m [俯角]40°			
	恵比壽樓全景並に同御池の圖 (横浜市江の島1-4-16)	開口部高さ2.5m	【建築物】内陸約40m 【視点場】高さ5.7~6.5m(建築物内)、標高約50m [俯角]50~60°			
	寄木明神社 (品川区東品川1丁目)	【建築物】内陸約1.5~6m 【視点場】内陸約3.5~8.5m	【建築物間のスリット】2m			【視対象となる建築物は(B)にある。
	引き締め型	海岸通り (横浜市中区海岸通り)	【視点場】内陸約0m			【建築物】視点場から200m 【海景】視点場から200m
築地海岸渡船場より但島を望むの圖 (中央区湊7-17付近)		【視点場】内陸約0m	【建築物】視点場から200m 【海景】視点場から200m	【視対象となる海景は(F-G)にある。	【海景は(D)に含まれない。	
水面一体型	羽田御茶屋 (大田区羽田6丁目)	【海景】視点場付近(ほぼ0m)にある	【建築物】内陸約0m 【視点場】高さ約1m(建築物一階)、標高0m	【視対象の視認状況⑥】	【視対象となる海景は(H)にある。	
	品川驛 (品川区北品川1-2丁目)	【海景】視点場付近(ほぼ0m)にある	【建築物】内陸約0m 【視点場】高さ約1m(建築物一階)、標高0m	【視対象の視認状況⑦】		
	金澤千代本の圖(Ⅱ) (横浜市金沢区瀬戸2-13)	【海景】視点場から約5mに位置する	【建築物】内陸約5m 【視点場】高さ約1m(建築物一階)、標高5m以下	【視対象となる海景は(H)にある。		
	芝浦景(Ⅰ) (港区芝浦1-7)	【海景】視点場から約30mに位置する	【建築物】内陸約0m 【視点場】高さ約4.2~5m(建築物二階)、標高0m	【視対象となる海景は(H)に含まれない。		
	本牧神社 (横浜市中区本牧和田19-1)	【海景】視点場から約15mに位置する	【建築物】内陸約0m 【視点場】高さ不明(建築物二階)、標高16.99m	【視対象となる海景は(H)に含まれない。		
	芝浦景(Ⅱ) (港区芝浦1-7)	【海景】視点場から約300mに位置する	【建築物】内陸約0m 【視点場】高さ約4.2~5m(建築物二階)、標高0m	【視対象となる海景は(H)に含まれない。		
	【注】表中「型の空間構成」における《 》内の要素については海岸線からの距離について記載した。					

また、成立要件における(A)は親しげな距離とされる12~24mの領域 (B)は耐えられない距離3m以上の快適と感じられる領域 (C)は活動の識別限界とされる24~135mの領域 (D)は一般に俯瞰しやすいとされる俯角8~30°の領域 (E)は建築として印象に残る距離とされる110m以内の領域 (F)は建築物のスカイラインとして見える100~600mの領域 (G)は船舶的複数集合した場合ににぎわいや活気を感じられる80~200mの領域 (H)は波が認識できる50m以下の領域を示す。

(2) 開放型

江戸期と明治期の開放型(表-3)をみると、「人」(X軸)と「海景」(Z軸)の分布が明治期に広がる傾向にある。

このような変化状況が空間座標にみられた開放型は、江戸期は、内陸の高台に立地する建築物が、海側に視線を海へと導くような大きな開口部を有することや、海景へと意識(視線)を向かせる自然物が周囲に備わることで、一般俯瞰域に含まれない遠方の海景をも一望できるという特徴をもっている(表-2)。例えば、図-6に示す「御殿山 看花」(所在地:品川区北品川3・4丁目)でいえば、「平・

断面図」からわかるように、視点場は海岸線から内陸230~280m、標高10mに立地する茶屋であり、海景への俯角は4°となるため、海景は「一般俯瞰域」には含まれない。しかし、ここでは桜や松といった自然の景物が周囲に備わり、その木間や木々の枝葉が伸びる方向に海が眺められることで、海へと意識(視線)が導かれ、海景が愛でられていた(表-1)。

この開放型は明治期になると、内陸の平坦な土地に立地する建築物の高い位置を視点場としていた(表-2)。例えば図-7の「鶴沼の圖」(所在地:鶴沼海岸2丁目)では、

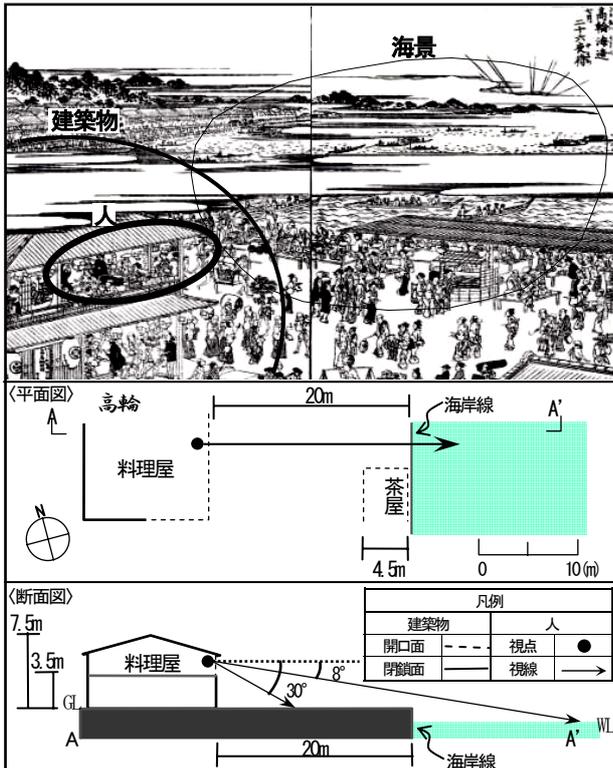


図-4 江戸期の同時型の典型例「高輪海邊七月二十六夜待」

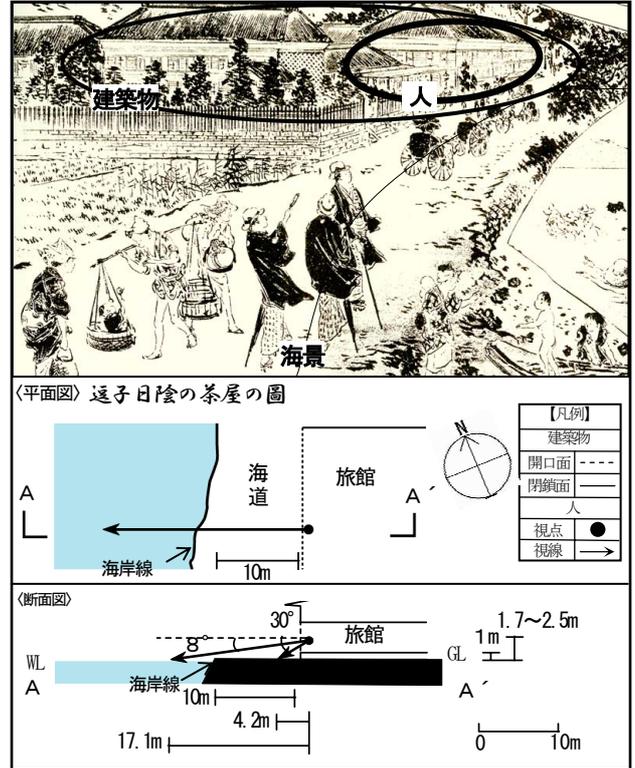


図-5 明治期の同時型の典型例「豆子日陰の茶屋の圖」

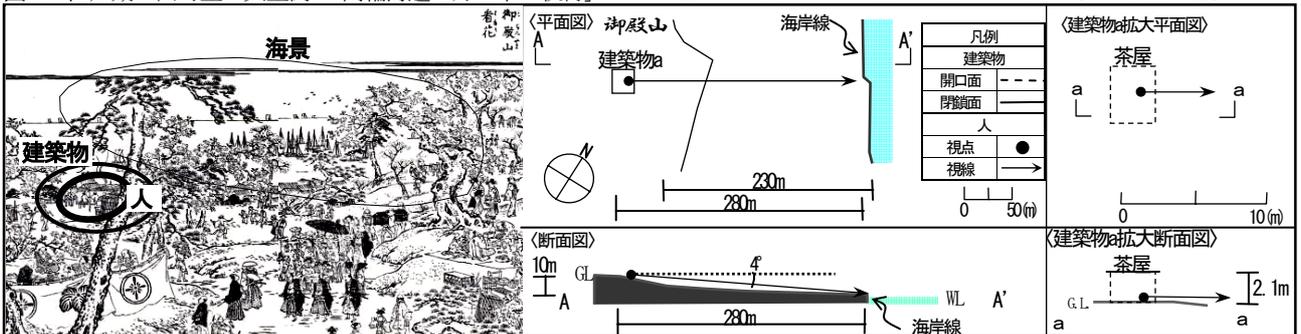


図-6 江戸期の開放型の典型例「御殿山 看花」

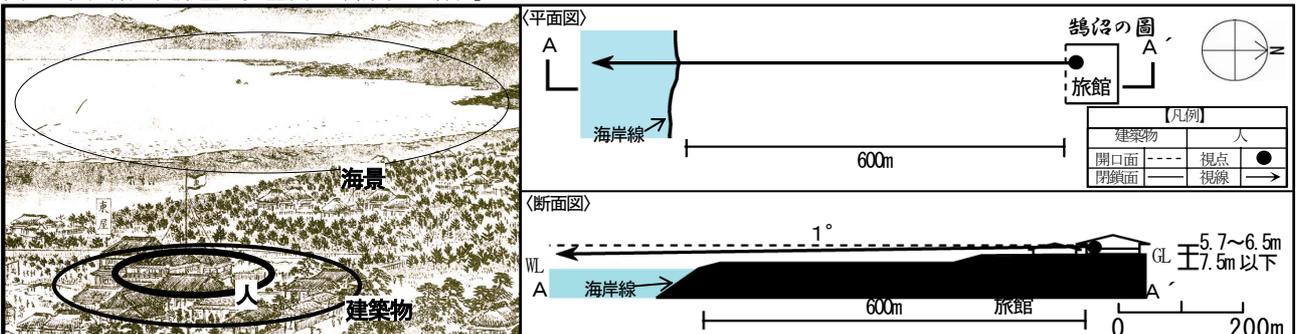


図-7 明治期の開放型の典型例「鶴沼の圖」

「平・断面図」より、視点場となる建築物(旅館)が海岸線から約600m内陸に立地し、視点の高さは標高7.5mの地形に立地する建築物2階(5.7~6.5m)にあることから、海景(江ノ島)への俯角は1°となる。よって表-4の【視対象の視認状況②】にあるように、海景は「一般俯瞰域」に含まれない。だが、【視点場の状況①】より壁面が柱と梁によって構成され海側が全面開口されることで、海景(江ノ島)が柱により縁取られ、遠方の海景をパノラマ景として印象深く眺めることができたと考えられる。

つまり「開放型」は、江戸期と明治期の分析から、視点場が海岸線から内陸200~800mのような遠い位置であっても、高台などの自然地形や建築物内の高い位置に視点場を配し、海側を全面開口したり、周囲に備わる自然物(添景物)を活かすなど、海景へ意識(視線)を向かせる仕掛けを施すことで、「一般俯瞰域」に含まれない海景をも開放的に享受できるものである。この開放型は、江戸期と明治期を通じて建築物の形態こそ茶屋から旅館へと変容したものの、同様に捉えられたことからわが国における伝統性の高い海景の観賞形態であるといえよう。

(3)引き締め型

引き締め型の江戸期と明治期における空間座標の分布状況(表-3)をみると、3要素の空間座標の分布状況に大きな変化はみられない。そこで各期それぞれの空間構成および視覚構造から観賞形態の変容状況をみていく。

江戸期の引き締め型は海道を視点場として建築物が連立することにより生じる間隙(スリット)や、建築物自体が視線の止めとなることで海景を引き締めていた(表-2)。

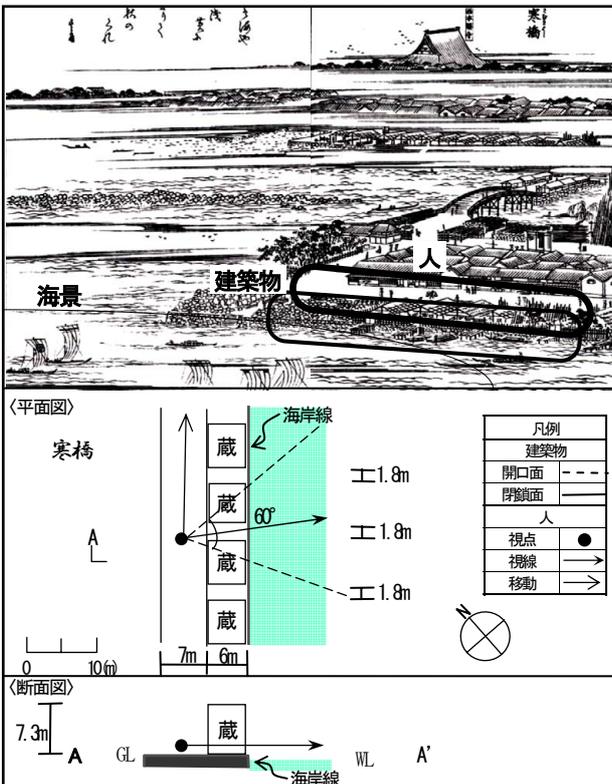


図-8 江戸期の引き締め型の典型例「寒橋」

例えば、図-8の「寒橋」(所在地:中央区築地7丁目)では、「平面図」より、建築物と視点場はそれぞれ海岸線からほぼ0mと6~13mにあり「建築として印象に残る距離の110m以内」¹⁸⁾に収まる。また、建築物のスリットの幅は1.8mであるため、視点場から海景を眺めると、「静視野60°の領域(以下「静視野」)¹⁹⁾に建築物が含まれていた。このように、建築物が視点場から認識しやすい位置にあり、海道上のどの視点場からでも必ず静視野内に含まれるような間隔をもつことで、海景の十分な引き締め効果を得ることができていたといえる(表-1)。

一方で明治期の引き締め型は、空間座標の分布状況に江戸期から違いはみられなかったものの、汀線延長方向の地先に立地する建築物や、対岸の海岸線沿いに林立する建築群により海景を引き締める観賞形態がみられた(表-2)。例えば、図-9に示す「築地海岸渡船場より佃島を望むの圖」(所在地:中央区湊7~17付近)では、「平面図」より視点場は海岸線沿いに位置し、幅200mの水域を介した対岸には建築物が林立していることがわかる。そのため、対岸の建築群は表-4の【海景までの視距離②】より「建築物のスカイラインとして見える100~600mの領域」²⁰⁾に含まれており、人々には対岸の建築群の存在が意識される。それにより、そこに介在する水域は人々に圍繞水域として認識され、人々の視線は水域へと自然と引き締められる。そして、その圍繞水域を航行する船舶は、「複数隻集合した場合にぎわいや活気を感じられる80~200mの領域」²¹⁾に含まれている。これらにより、視点場からは、対岸の建築群より創出される圍繞水域を航行する船舶のにぎわいが享受できるといえよう。

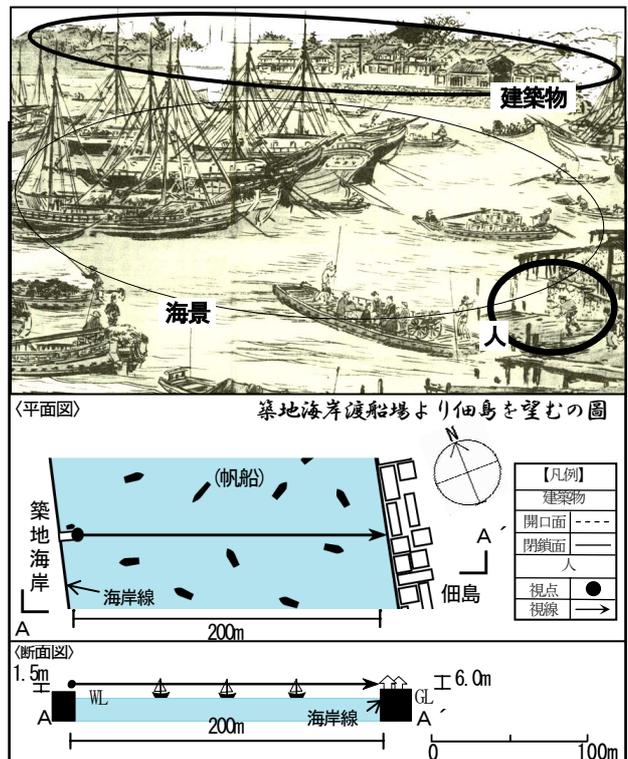


図-9 明治期の引き締め型の典型例「築地海岸渡船場より佃島を臨むの圖」

また、図-10の「海岸通り」(現在地:横浜市中区海岸通り)では、視線が汀線延長方向に誘導されることで、その地先に立地する建築物が視線の止めとなる(表-2)。このような観賞形態が得られた要因として、「平・断面図」をみると、汀線がグランドレベルから静視野で眺められ、さらにその静視野に「電柱」や「柵」が含まれている。これにより、陸・海の境界が際立ち、視線が汀線に誘導されたと考える。また、建築物は表-4の【海景までの視距離②】にあるように「建築物のスカイラインとして見える100~600mの領域」²⁰⁾に含まれる汀線延長方向の200m先に立地し、明確に視認できたため、視線の止めとなり、海景を引き締めていたといえよう。

以上のように「引き締め型」は、江戸期は視点場から間隙を有して連立する建築物までの視距離が110m以内にあり、海道上の視点場から静視野内に、建築物のスリット越しの海景が眺められることが引き締め効果の成立要件であったが、明治期の分析結果から、建築物が110m以遠に位置していても、引き締め効果を支援する建築物へと視線を誘導する汀線や圍繞水域が存在することで、江戸期と同様に引き締められた海景が享受できるものであるといえる。このように、引き締め型は江戸期と明治期においてその空間構成と視覚構成に大きな違いがみられることから、ともすれば茫漠となりがちな海景を引き締める手法はさまざま創出可能であり、江戸期から明治期においてこの型が成立していた海景までの視距離200m以内の範囲では、特にその可能性が高まるといえよう。

(4)水面一体型

この型の空間座標の分布状況(表-3)をみると、江戸期は3要素全てが海岸線を示す原点近くに寄り集まっているのに対し、明治期になると、「海景」(Z軸)の座標が沖合い方向へ分布していることがわかる。

このような変化が読み取れた水面一体型は、江戸期は建築物内の低い視点場から海景を眺めることで水面との一体感を享受できるという特徴をもつ(表-2)。例えば、図-11の「瀬戸明神社(II)」(横浜市金沢区瀬戸)でみれば、「平・断面図」より海岸線ほぼ0mの高さ約1mの位置に視点場があることがわかる。また海景は、視点場から約15m沖合いにあるため、「波が認識できる50m以下の領

域(以下「波の認識距離」)¹⁸⁾で眺められていた。つまり江戸期は海景が「波の認識距離」にあり、視点場が平面的にも断面的にも水面に近い屋内にあるという状況が創出されることで、海景との一体感が享受できていた(表-1)。

一方で、明治期には、建築物2階を視点場として、遠方の水面との一体感を享受する観賞形態が捉えられた(表-2)。例えば図-12の「芝浦景」(現在地:港区芝浦1-7)では、「平面図」より建築物は海岸線沿いに立地し、「断面図」から視点の高さは約4.2~5mとなることがわかる。つまり表-4の【視点場の状況③】にあるように、海岸線から平面的には非常に近く、断面的には高いところから海景を眺めていた。これより、視点場から海景を望むと、内陸の地表面が「俯角の最大下限45°」¹⁹⁾以下にあり、不可視となるため、海景のみが眺められる状況が創り出されていた。そうして眺められる海景は、「一般俯瞰域」である約8.7~35.6mの範囲にあり、【海景までの視距離③】にあるように、「波の認識距離」に含まれることが捉えられた。こうした状況が創出されることで、断面的に

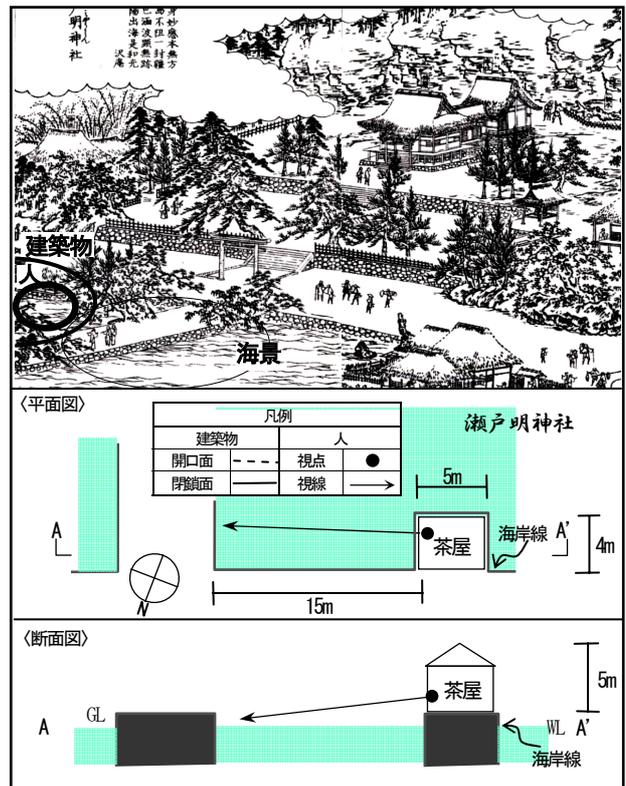


図-11 江戸期の水面一体型の典型例「瀬戸明神社(II)」

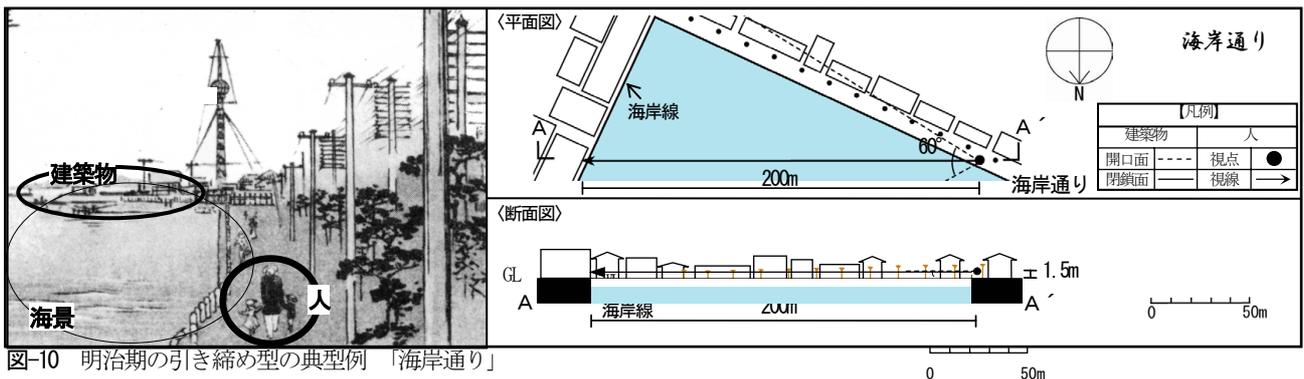


図-10 明治期の引き締め型の典型例「海岸通り」

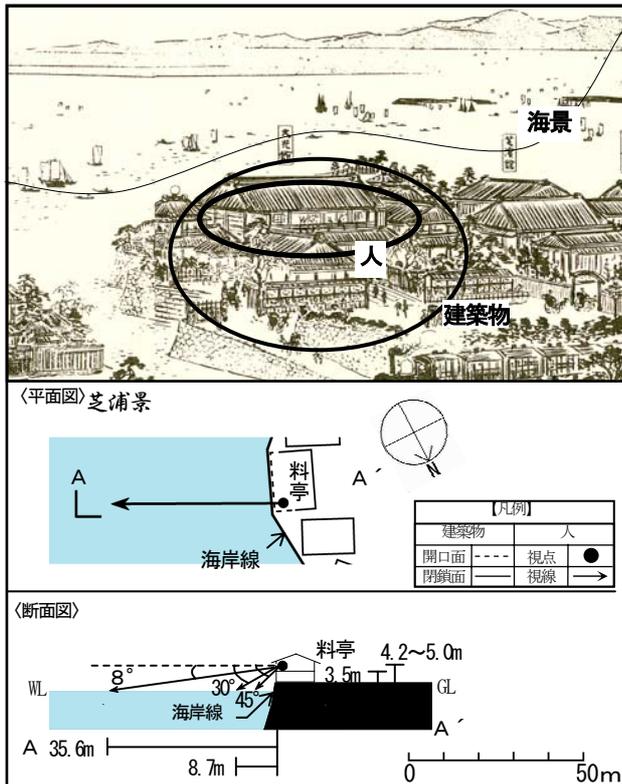


図-12 明治期の水面一体型の典型例「芝浦景」

海景までの距離が離れた建築物2階が視点場となっても水面との一体感が享受できていたといえよう。

つまり「水面一体型」は、江戸期と明治期の空間構成の分析結果から、海岸線近傍に視点場が確保できれば、海景とのレベル差(断面距離)に応じて、「波の認識距離」に含まれる海景のみを眺められる状況を創出すること(不可視領域の活用)により、海景との一体感が享受できるといえよう。

5. まとめ

本研究では、江戸期と明治期において同一の「海景観賞の型」が得られたにもかかわらず、それらの視点場には変化がみられたことに着目して、江戸期から明治期における「海景観賞の型」の変容状況を、各型の空間構成や視覚構造から明らかにした。その結果、明治期になると、「同時型」「開放型」「引き締め型」「水面一体型」の4型において江戸期と異なる空間構成が得られたことから、「海景観賞の型」を成り立たせる空間構成は、江戸期から明治期へと時代を経て多様化していたといえよう。

これらから、「海景観賞の型」を成り立たせる空間構成は多様に創出できる可能性を有していると考えられる。

このことをふまえると、今後のWF開発に際しても、WFを構成する3要素の関係性、特に建築物の景観的役割に十分留意し、視覚構造をその計画・整備に活かして多様な海景の観賞形態を創出していくことが望まれる。

謝辞：本研究成果の一部は「平成17年度文部科学省科学研究費補助金・若手研究B(研究代表者：岡田智秀)」によるものである。

【補注】

※「明治東京名所図会」には「江戸名所図会」の絵図を用い、明治期における名所を説明しているものがある。

【参考文献】

- 1) 岡田智秀・横内憲久・島妃沙子:わが国における「海景観賞の型」とその空間構成に関する研究—江戸名所図会にみる視覚構造を通じて—,土木計画研究・論文集 vol.19no.2, pp.321, 2002.9
- 2) 市古夏生・鈴木健一:新訂江戸名所図会 全8冊,筑摩書房,1996.10~1997.2
- 3) 寶泉立夫・横内憲久・岡田智秀・神宮宇良太:「人と建築物と海」の関係からみた海景観賞の型に関する研究(その9),日本建築学会学術講演梗概集(A-2), pp435~436, 2004.8
- 4) 朝倉治彦・植田満文:明治東京名所図会 上・下巻,東京堂出版,1992.9
- 5) 迅速測図原図覆刻版編集委員会:明治前期手書彩色関東測図,日本地図センター,1991.3
- 6) 地図資料編集会:5千分の1江戸—東京市街地図集成(1657—1895),柏書房,1998.11
- 7) 地図資料編集会:明治前期関東平野地誌図集成,柏書房,1989.7
- 8) 清水靖夫:明治・大正・昭和東京1万分1地形図集成,柏書房,1983.11
- 9) 鈴木博之・初田亨:図面でみる都市建築の明治,柏書房,1990.4
- 10) 建築雑誌 第71号,第100号,日本建築学会,1887
- 11) 木造建築研究フォーラム・図説木造建築事典編集委員会:図説・木造建築事典[実例編],学芸出版社,1995.3
- 12) 堀越三郎:明治初期の洋風建築,丸善,1929
- 13) 村岡実:日本のホテル小史,中央公論社,1981.6
- 14) 樋口清之:ヴィジュアル百科 江戸事情 第五巻建築編,雄山閣出版会,1993.5
- 15) 陣内秀信:江戸東京のみかた調べ,鹿島出版会,1993.9
- 16) 芦原義信:外部空間の構成,彰国社,1962.4
- 17) 篠原修:新体系59 土木景観計画,技報堂出版,1999.4
- 18) 高橋鷹志ほか:外部空間のディテール①計画手法を探る,彰国社,1978.8
- 19) 篠原修:景観用語事典,彰国社,1999.6
- 20) 戸沼幸市:人間尺度論,彰国社,1978
- 21) 上島頼司・東島義郎・斎藤潮:船舶の観賞性に関する研究,土木計画学論文集・講演集 vol115(1)-2巻 pp.973-980, 1992
- 22) 人文社編集部:古地図・現代地図で歩く明治大正東京散歩,人文社,2003.10